

慈しむ　　く人の心を開くく

鳥の雛かひこを養うが如く、ともし火に油を添うるがごとく、枯れたる草に雨の降るがごとく、飢えたる子に乳を与えるが如く、法華經の御命を継がせ給う事、三世の諸仏を供養し給えるにてあるなり。十方の衆生の眼を開く功德にて候べし。尊しとも申すばかりなし。

(日蓮聖人御遺文・上野殿御返事)

蒙古軍が襲来しました(文永の役)。運良く九州占領を免れました。幕府は蒙古の使者を龍の口で処刑して戦う姿勢を明確にし、兵を博多に集結し防塁を築いていました。日本中が騒然としていました。飢饉もありました。上野殿(南条時光)は浅間神社の造営の役を受けていた上に農繁期で多忙を極めていた中で、身延に寄進の品(麦・海苔等)を贈りました。その礼状の一節です。

鳥が雛を養うように、燈火に油をたすように、枯れかかった草に雨が降るように、飢えたる子に乳を与えるように、法華經を守る私(日蓮聖人)の命を救うことは法華經の命を継ぐこと、仏に供養することになります。衆生の目を開かせる功德があります。いいようもなく尊いことです。

人は多忙になると周囲を思いやる優しさを忘れます。特に戦乱や飢饉の中では心に余裕が無くなり利己的になります。武士であった南条時光は落ち着かない毎日だったはずです。そんな状態でも、身延の山中の日蓮聖人を思いやる心の余裕を持っておられました。

厳しい状況の中でこそ、その人の人格の豊かさが問われるのでしょうか。

イラクでは毎日のように自爆テロで人の命が失われています。その中でも平和をとり戻そうと懸命に頑張っているイラクの人々も多いことでしょう。経緯は別として派遣されて現場に居る自衛隊の人々は、少しでもイラクの復興に役立ちたいと働いておられる。それを理解され歓迎される日が一日も早いことを祈ります。平常心を奪う戦争は悲しい。

どんな宗教も愛と平和を説きます。武器を持って解決しようとするよりも、枯れた草に雨が降るように、飢えたる子に乳を与えるように……、それが戦場で荒んだ人々に冷静な心の眼を開かせることになるのですが。

他の神の存在をいっさい認めない一神教のキリスト教とイスラム教には仏教のような柔軟さは望めないのかもしれませんが。

平成十六年夏号

仏になりやすき事　く施のころく

仏になりやすき事は別のよう候わず。早魃かんぼうに渴けるものに水をあたえ、寒氷に凍えたるものに火をあたるがごとし。また、二つなき物を人に与え、命の絶ゆるに人の施にあうがごとし。

(上野殿御返事)

仏になるには特別の難しい方法があるわけではないのです。早魃で渴いたものに水を与え、寒さに凍えたものに火を与えるような事です。またたった一つの物を人に与え、死にそうになった時に援助の手がさしのべられるような事です。

単純明快な表現ですね。こう書かれると、とても簡単なことのように思えてしまうのが不思議です。しかし考えてみると、早魃の時は自分も飢え渴いているはずで、凍えた人の前に居る自分も寒いはず。たった一つの物が大切であればあるほど、自分のためにとっておきたいと思いませんか。たび重なる法難で、死を目前にして心ある人の援助で救われた経験を持たれる日蓮聖人だからこそ言える言葉かもしれません。

『食育』という言葉が聞くようになりました。戦後の食糧難の時代に、米軍から供与された食料で学校給食が始まりました。私自身も脱脂粉乳やコッペパンの給食で育ちました。美味しいとは言えないものでしたが、「生きる＝食べる」の時代でした。

戦後六十年経って、経済的には豊かな生活に慣れきった日本人にも問題が無いわけではありませぬ。忙しい親がお金を与えて好きな物を食べさせる。そうして育った人が親になって、本来は親から子へと伝えられた「食」の教育が危うくなりました。政府は子供の栄養バランスの崩れに直面して、単に昼食を支給する給食から『食育』に取り組むことになったのだそうです。

今の日本では早魃や極寒で命を失うことはないでしょうが、お金や物を与える前に、必要性を確認する手間をかけること。それが物と共に『ころ』を与えることになるのでしょうか。与える行為は質を問われるのですね。

平成十七年秋号

財たから　　命にかえるもの

いのちと申す物は一切の財の中に第一の財なり。……三千大千世界に満て候財を命には換えぬ事に候なり。されば命は灯のごとし。食は油のごとし。油尽くればともし火消えぬ。食無ければ命絶えぬ。……白米は白米にあらず。即ち命なり。

(日蓮聖人・事理供養御書)

白米など供養の品への礼状の一節です。

身延で食に事欠く厳しい御生活を送られていた聖人に贈られた品は、まさに命そのものを贈られたと実感されたことでしょう。

美食に慣れた現在の日本人には、食と命と実感することは難しいのかもしれませんが。また食が他の生き物の命を頂いている事と実感して「いただきます」と言うことも少なくなっています。

先般のハイチやチリの地震で暴動・略奪が起こったと報道されました。子供に食料や水を与えたいと訴える人々の声も。殊に政府の機能が麻痺したハイチでは生き残った人も食を絶たれ、命の危機を実感しての略奪だったのでしょう。悲しい出来事です。

思い起こせば阪神大震災では、被災者が支えあう組織ができ、全国から支援者が集まりました。

温和な国民性、国と国民に余力が有った事などの違いでしょう。有難い国です。

最近報道されている黒マグロや鯨の問題は、単に資源保護・自然保護とは違う意図も感じます。日本人の食習慣への理解を求めめることも大切ですが、もしそれが食べられなくなっても、それで日本が食糧危機に陥ることはないでしょう。食習慣は状況に応じて変化してきた事ですから。

国力に支えられて世界から多くの食料を得ている日本は、国の力が低下すれば食料を買えなくなる。むしろこの事の方が問題だと、鯨肉と脱脂粉乳、コッペパンの給食で育った時代の私は感じるのです。

飽食の時代にも問題はあります。自殺者が三万人を超え、国の重要課題になっています。単に一つの原因で自殺するほど弱い人は少なく、心が弱っている状態が続いていて何かのきっかけで実行するパターンが多いようです。人と人の心の繋がりが希薄になった現代では、弱った心に気付き、話を聞き共に悩むことで生きる勇気を取り戻す事が難しくなりました。まず身近な人から声を掛け合ひましょう。人の繋がりを取り戻しましょう。

そして「全世界の財宝も命には換え難い」という日蓮聖人のお言葉を心に留めて。

南無妙法蓮華經　　合掌